

12/4 『隣人のために何ができるか?』 (ルカ2:25~37)

長谷川 望 牧師

- *サンタクロースは4世紀340年ころに今のトルコの司教(牧師)であったニコラウスという人に由来する。裕福な家庭に生まれたが、両親が相次いで亡くなったため孤児になり莫大な財産を得た。しかし、彼は両親からしっかりと聖書教育を受け、自分は神の大きな恵みで生まれたと感謝していたので、生涯を神様のささげようと司祭になる。ある3姉妹が貧しいがゆえに身売りされることを聞いてその家に行き、煙突から金貨を投げ与えて救った話からサンタクロース伝説が生まれた。常に弱い、貧しい人々を助けるために隠れて多くの良い働きをした人である。
- *「すると、ある律法の専門家か立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生、何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか。」すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」(10:25~28) 律法学者の「どうしたら永遠のいのちを得られるか」という問いに端を発して、再び「では、私の隣人とは、だれのことですか。」(10:29)という問いになった。これに対して主イエスが答えられたのが「良きサマリヤ人のたとえ」である。
- *強盗に半殺しにされた人のそばを通る3人。イスラエルの祭司とレビ人がそばに来るが、取返して避けて通りすぎてしまった。3人目のサマリヤ人は「かわいそうに思い」「傷の手当をし」「宿屋へ連れて行って介抱し」「お金の心配までした」。愛のことは頭ではよく知っていた祭司やレビ人は何の行為もしなかったが、ユダヤ人にとって「憎むべき異邦人」であったサマリヤ人だけが本当の愛の行為を実践した。
- *「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」(10:36~37) イエスの問いは「だれが隣人か」ではなく、「誰が隣人になったか」である。ユダヤ人にとって「隣人」はユダヤ人の同胞のみであって、異邦人は隣人ではなかった。外国人や貧富、社会的地位などに関係なく、「愛の行為」が必要な人に手を差し出すときに、その人が「隣人になる」とイエスは言われる。
- *すべての困っている人に、どんな敵でも愛し、愛の行為をすることは私たちにはできない。しかし、私たちのごく身近で起こったことで、神様からの声が聞こえたとき、小さくても愛の行為に関わっていこう。
「良きサマリヤ人」のたとえの登場人物の中で、私を表しているのは「強盗に襲われて瀕死の状態の」人ではないか。また、このサマリヤ人はまさにイエス・キリストそのものを表しているのではないか。私たちの魂がボロボロになっているときに、救い主イエスが来て助けてくださったのである。その愛に報いたい。

